

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

中信登山研究会 登山技術研修交流会

前号に書いた研修会の報告である。いきさつはともかく、福島、宮城に続いて「高雪研」の一環として実施した3回目の研修会となった。初日のプログラムは講習1「栃木雪崩事故検証委員会の報告」(大西)、講習2「雪と雪崩について」(防災科学技術研究所：上石勲氏)、講習3「雪崩のリスクについて」(防災科学技術研究所：中村一樹氏)、講習4「ワークショップ、雪山での引率」(宇都宮大学：近藤伸也氏)、講習5「雪崩ビーコンを使ったレスキュー」(大西)の順に、午後1時から夕食をはさみ午後8時までみっちり行った。

参加者は中信地区の7校(白馬、大町岳陽、池田工業、松本県ヶ丘、松本美須ヶ丘、松本深志、松本蟻ヶ崎)から生徒39名、顧問14名。大西の話は、栃木県の報告書をどう読むか、報告書に盛り込まれた事故原因とそこから導き出された提言を高校山岳部活動にどう生かしていくかという観点での話である。

続いて上石さんが雪の性質と雪崩が起こるメカニズム、雪崩の種類について、また雪崩を防ぐための行動などについて高校生にもわかりやすく話してくださった。話の後半では、那須雪崩事故の現地調査の結果も織り込んだ興味深い内容であった。

中村さんは、雪崩のリスクを構成する3つの要素「雪崩ハザード」「曝露」「脆弱性」についての説明をされた。雪崩ハザード(雪崩斜面のもつ危険性)になりうるものとして「地形」「天候」「積雪」があること、曝露(危険斜面での滞在時間や場所)のリスクとしての「行動」のとりかた、脆弱性(雪崩に遭った際の耐性の強さ)に対応するための「レスキュースキル」と「装備」を具体的な写真や動画を使って紹介してくださった。非常に整理された論理的な話であった。

続くワークショップでは、防災の専門家である近藤さんが「雪崩回避のための判断能力向上のための演習」ということで、前2者の講義を踏まえて、演習課題を設定してグループごとに演習課題を課した。課題は次のような内容である。「あなたはA高校の山岳部の顧問です。A高校では3月の第4土曜日に冬山合宿を行う予定でした。金曜日の降雪の影響を考慮し、日曜日に登山するように予定を変更しました。日曜日の天候は良好で、予定通り飯縄山山頂への到達を目標に登山を行います。残雪のある飯縄山を登山していると標高1800m地点で生徒の一人からワッフ音のようなものが聞こえたと報告が入った」という前提を立て、その際のいくつかのデータを提示し、登山部の顧問として⇒登山を続けるか、下山するかを考えてみるというものである。顧問はもちろん、生徒にも「顧問である」という想定をして取り組んでもらった。結果は結構興味深いものであった。というのは、生徒は最初の段階では続けるという結論を出したものが多くということである。それが議論の中でハザードを冷静に考えて、最終結論を導いていく。その過程がとても興味深かった。このような演習を研修会の中に盛り込むことで、安全意識は向上することが実感できた。

講習5では、小生がビーコンの基本構造やコンパニオンレスキューの導入の話をして、翌日の実技に向けての基本知識を共有した。

講習終了後は、生徒相互、顧問相互で交流会をもち、地区内山岳部の融和が図られた。

2日目は鷹狩山麓をめぐるルートを設定し、その中で読図技術の向上とビーコン搜索の訓練を行った。県が揃えてくれた18台のビーコン（マムートバリボックス）と山岳センター所有の24台（トラック）を借用しての訓練となった。今年はまだにみる少雪で大町市内はおろか、鷹狩山にもほとんど雪がない。そんな状況下、山の子村キャンプ場まで移動をした。雪がないので、雪質観察もシャベリング実習もすることはできないので、ビーコン搜索に的を絞って行った。最初は先生方にモデルになってもらい「6人パーティがトラバース斜面を一人ずつ移動中に、最初に進んでいたリーダーが雪崩に流された」という想定で、残る5人でレスキューに入るというシミュレーションをした。リーダーを決め、搜索の方針を決めて、ビーコン搜索をするという流れの中で、場面場面でストップして小生が説明をしながら、先生方には体験してもらい、生徒にはビーコン搜索の実際を感じさせた。

その後、生徒を6班に分け、2班ずつ3グループを作って、3か所でビーコン搜索を行わせた。3本アンテナのビーコンは扱いやすいので、ビーコンを探すだけならば生徒も難なくマスターできる。本来それでは雪崩搜索にならないことは十分承知の上でいうのだが、ビーコンの有効性を知らしめるには十分だ。探す班とその様子を観察する班の両方を交互に体験させ、その後観察し合ったことを話し合わせた。

その後は、読図訓練をしながら、コース取りしたルートを辿った。冬は雪のため住職が不在になる名刹霊松寺を拝観したりしながら、ほぼ予定通りの午後2時には研修を終えた。

以下、生徒の感想を載せます。生徒は感受性も鋭く、学ぶ力も持っている！（実感）

（A女）雪崩の話聞いて、雪崩のリスクの話が心に残った。雪崩リスクをつくっている3つの要素とそれを回避するための歩き方などを学べたので、歩くときに注意したい。雪がふりはじめて強くなって来たら、無理をせず下りることを決めた方がいいなど、自分がそのような立場になったとき使える考え方を学べた。コンプレッションテストや雪崩のハザードなど自分の知らなかった知識を得ることができた。交流会では個性が独特な人ばかりで、とても楽しかった。もっと皆でできる何かがあればよかった。雪崩に巻き込まれてから死に至るまで18分しかない中で、ビーコンやエアバッグなどを身につけていれば15分から18分で見つけられるため命を守るには重くても持って行った方がいいと思った。2日目も他校とグループを組んでオリエンテーリングをするのは楽しかったし、仲も深まったと思うのでよかった。ビーコンを使っての体験をしたことで、自分がそういう立場になってもおちついて行動できそうだった。

（B女）事故はあったものの雪崩のことについてはよく知らなかったもので、とても勉強になった。栃木の事故も、最初はまあしょうがないのかなと思うことがあったけど、報告を聞くと、事故が起きるまでに様々な要因があってもしかしたら防げた事故だったのかもしれないと思った。雪崩を数字的に考えるのは少し難しく理解しきれないところもあったが、雪崩が起きやすい傾斜角、雪が流れ出す風速など覚えておくと役に立つと思うので、今後に役立てたい。ワークショップでは緊張したけど、しっかり山の知識があって、色々な要因から推測して、それらをつなげて一つの答えに導けるのがすごいと思った。ビーコン搜索については、探すのは簡単だったけど、いざ本当に雪崩が起きて巻き込まれたらあんなに簡単にはいかないだろうと思った。